



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	韓国語一型アクセントに関する研究：忠清道青陽方言を中心に
Author(s)	崔，鉉鎭
Citation	研究論集，13，303(左)-319(左)
Issue Date	2013-12-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/54076
Type	departmental bulletin paper
File Information	017_CHOI.pdf



韓国語一型アクセントに関する研究

— 忠清道青陽方言を中心に¹ —

崔鉉鎭 (チェ・ヒョンジン)

要 旨

本稿では、韓国語一型アクセントの一般的特性を明らかにするための第一歩として忠清道 (chungcheong-do)² 青陽 (cheongyang)³ 方言を対象に、単純名詞のアクセント、複合名詞のアクセント、用言のアクセントを記述・分析した。その結果、青陽方言は品詞を問わず、文節の第1・2音節目が高いアクセント特徴を持つ一型アクセントであることが明らかになった。しかし、分節音と音節数がアクセント型の決定に大きな影響を与える。複合名詞の場合は文節全体が5音節以下であれば、基本的に一つのアクセント単位にまとも、6音節以上になると、2つのアクセント単位に分かれる。一方、当方言は言い切り形と接続形⁴の区別を持ち、言い切り形は文節内で必ず下降が持つのに対し、接続形は下降を持たない特徴を持つ。

1. はじめに

従来、韓国語のアクセント研究は、アクセント型の対立を持っている方言を中心に行われ、対立を持たない方言に関しては、一部の方言を対象とした断片的な記述はみられるものの、本格的な記述や考察は殆どない。それゆえ、韓国語にはどのような性質を持つ一型アクセントが存在しているのか、また、一型アクセント方言の間にどのような共通点と相違点が存在するのかなど、未だに明らかにされていない部分が多い。

¹ 本稿は、著者の2012年度修士論文を基に、修正・加筆したものである。

² 韓国の中部に位置する地域として、忠清南道と忠清北道、太田広域市を含めて指す地名である。

³ 忠清南道の中央に位置する郡として人口は約3万3千人(2010)である。

⁴ 「言い切り形」と「接続形」については上野(1976)を参照されたい。

本稿では、忠清道青陽方言を対象に、記述言語学的手法をもちいて、データの記述と分析を行い、忠清道青陽方言のアクセント特徴を明らかにする。

2. 先行研究

忠清道青陽方言のアクセントに関する先行研究は、管見の限り見当たらない。

但し、韓国語一型アクセントについて取り上げている先行研究には、福井(2001)、孫(2005)、孫(2007)がある。

福井(2001)は平安道(pyeongan-do)方言と一部の全羅南道(jeorra-namdo)方言を一型アクセントして捉えている。

孫(2005)は忠清道堤川(jecheon)方言と済州(jeu)道西帰浦(seogwipo)方言を一型方言として捉えている。

孫(2007)は江原道(gangwon-do)の麟蹄(inje)方言、高城(goseong)方言、襄陽(yangyang)方言、束草(sogcho)方言、楊口(yanggu)方言と全羅道の益山(igsan)方言、淳昌(sunchang)方言、そして忠清道の堤川方言、永同(yeongdong)方言、最後にソウル方言を一型方言として捉えている。

しかし、上記の先行研究は断片的な記述しかされていない。

3. 青陽方言のアクセント

本節では、忠清道青陽方言を対象に単純名詞のアクセント、複合名詞のアクセント、用言のアクセント、言い切り形と接続形の区別について記述を行う。

3.1. 調査方法及びインフォーマント

3.1.1. 調査方法

調査方法に関しては、若年層の場合は、読み上げ式と絵カードを並行して調査を行った。一方で、年配層の場合は読み上げ式はできるだけ避けるようにし、絵カードを用いてそれを見せて発音してもらう形式を主に取った。さらに、絵では説明ができないものは、質問し発音してもらう形式を取った。場合によっては、短文を作り、発音してもらった。

音調表記は、「○」は任意の音節、「[」は音調の上がり目、「]」は音調の下がり目を示す。「|」と「|」はそれぞれ下降調とアクセントの切れ目を示す。「◎」は助(動)詞と活用語尾を示す。「。」と「…」はそれぞれ言い切り形と接続形を示す。

3.1.2. インフォーマント

以下にインフォーマントに関する情報を示す。

年配層 方言話者①：男性。1930 年生まれ、農業、青陽で生まれ育って現在も居住している。
学校教育は受けていない。

若年層 方言話者②(筆者)：男性。1987 年生まれ。中学卒業まで青陽で生まれ育った。両親
両方とも青陽で生まれ育った。

方言話者③：男性。1992 年生まれ。中学卒業まで青陽で生まれ育った。複合名詞の
調査のみ情報を提供してもらった。

3.2. ハングルローマ字転写法

本稿では、ハングル（韓国語を書き記す文字）を以下のようにローマ字転写する⁵。

子 音：/b, p, pp, d, t, tt, j, ch, jj, s, ss, g, k, kk, m, n, ng, h, r/

母 音：/i, e, ae, eu, eo, a, u, o/

半母音：/y, w/

/ae/と/e/は、若年層では既に区別されなくなっているが、年配層では、明確に区別されている。表 1 に例を示す。

表 1 年配層における /ae/ と /e/ のミニマルペア

/gae/[kɛ] (犬)	/ge/[ke] (蟹)
/bae/[pɛ] (梨, お腹, 倍)	/be/[pe] (麻糸などで織った布)
/seo.ur.ae/[sʌurɛ] (ソウルの子供)	/seo.ur.e/[sʌure] (ソウルへ)

さらに、母音の長短も音素として認められる。表 2 に例を示す。

表 2 年配層における母音の長短によるミニマルペア

/ba:r/(簾)	/bar/(足)
/go:mur/(古物)	/go.mur/(餅にまぶす粉)
/a:n.i.da/(中だ)	/a.ni.da/(一ではない)

⁵ 上記に示された表記は、韓国文化観光部告示第 2001-8 号 (2000.7.7) のローマ字表記法に基づいたものである。

3.3. アクセント特徴

3.3.1. 単純名詞のアクセント

音節ごとに見ていくと、1音節名詞の場合、単語単独形は下降調として現れる。1音節助詞が付いて全体が2音節になると、全て第1音節目だけが低い音調型で現れる。2音節以上の助詞が付いて文節全体の音節数が3音節以上になると、第1音節目と第2音節目が低い音調型で現れる。

	単独形	-i/-ga(ーが) ⁶	-i.da/-da(ーだ) ⁶	-bo.da(ーより)
(1) gae (犬)	[○]]。	[○]○。	[○]○。	[○○]○。
(2) gong (ボール)	[○]]。	[○]○。	[○○]○。	[○○]○。

2音節名詞の場合、単語単独形は1音節名詞に1音節助詞が付いた場合と同様、第1音節目だけ低い音調型として現れる。1音節以上の助詞が付いて文節全体の音節数が3音節以上になると、第1音節目と第2音節目が低い音調型で現れる。

(3) go.gi (肉)	[○]○。	[○○]○。	[○○]○。	[○○]○○。
(4) gu.reum (雲)	[○]○。	[○○]○。	[○○]○○ ⁷ 。	[○○]○○。

3音節名詞の場合は、単語単独形から第1音節目と第2音節目が低い音調型で現れる。1音節助詞と2音節助詞が付いても音調型は変わらない。

(5) mi.na.ri (芹)	[○○]○。	[○○]○○。	[○○]○○。	[○○]○○○。
(6) do.ra.ji (桔梗)	[○○]○。	[○○]○○。	[○○]○○。	[○○]○○○。

4音節名詞の場合、単語単独形は第1音節と第2音節目が低い音調型で現れ、1音節助詞が付いた場合も同じ音調型として現れる。しかし、2音節助詞が付くと、1音節助詞が付いた場合とは違い、低い音調が第4音節目まで続いた後、助詞から低くなる音調型で現れる。これは、音節数の制約によってアクセント単位が2つに分かれているからであり、助詞の音節数の制約によるものと考えられる。この現象については、3.3.2.2節で詳しく述べることにする。

⁶ 指定詞「-da/-i.da」は、語の最後の音節構造により、どちらを取るかが自動的に決まる。語の最後の音節構造が開音節であれば、-da を、閉音節であれば、-i.da を取る。

⁷ 年配層の場合、上記のように1つのアクセント単位で現れる場合もあれば、[○○|○]○のように2つのアクセント単位に分かれて現れる場合もあった。

- (7) ji.pu.ra.gi (藁) [○○]○○。 [○○]○○◎ [○○]○○◎。 [○○○○]|◎◎。
 (8) mi.kku.ra.ji (泥鰌) [○○]○○。 [○○]○○◎。 [○○]○○◎。 [○○○○]|◎◎。

一方で、年配層においては、母音の長短が音素として認められる。しかし、この母音の長短がアクセント型に影響することはないので、ここでは例のみ示す。

	単独形	-i.da/da (ーだ)
(9) i: (二)	[○:]]。	[○:] ◎。
(10) yeo:.chi (バッタ)	[○:] ○。	[○:] ◎。
(11) geo:.bug.i (亀)	[○:] ○ ^s 。	[○:] ◎◎。
(12) gae:.ttong.beor.re (蛭)	[○:] ○○。	[○:] ◎◎◎。

以上、(1)～(12)までのデータと考察をまとめ、表3に示す。

表3 青陽方言における名詞のアクセント型

1	2	3	4	5
[○]	[○]○	[○○]○	[○○]○○	[○○]○○○

青陽方言の名詞のアクセント特徴は、文節の1音節目と2音節目が高いことである。しかし、表で分かるように、1音節と2音節の場合に限っては、本来のアクセント特徴が現れない。

これは青陽方言が言い切り形と接続形の区別を持つ点と大きく関わる。青陽方言の言い切り形は文節内で必ず音調の下がり目を持つ。しかし、単位（音節数）が短い場合はアクセント特徴より、言い切り形の特徴が最も優先されるため、1音節は下降調、2音節は第1音節目のみ高い音調型で現れる。文節が3音節以上になると、アクセント特徴と言い切り形の特徴がぶつかり合うことがないため、本来のアクセント特徴が現れるようになる。

3.3.2. アクセント型の決定に影響を与える要因

3.3.2.1. 分節音

若年層の場合、文節全体が3音節以上かつ語頭子音が激音、濃音、無声歯茎摩擦音(s)、無声声門摩擦音(h)である場合は、表3のアクセント型と共に第1音節目のみ高い音調型でも現れる。しかし、第1音節目だけ高い音調型のみを持つ語彙が一語も存在せず、音声的な環境による予測が可能であるため、表3で示したアクセント型と音韻的な対立をなしていないと解釈で

⁸ 長母音の場合は第1・2音節目が高い音調型で現れる場合もあれば、第1音節目だけ高い音調型で現れる場合もある。

きる。また、文節単位が短い場合は現れやすいのに対し、長くなればなるほど、現れにくくなる。また、個人差も大きい。

一方で、年配層の場合は、母音の長短は持つが、アクセント型の決定にはほとんど影響を与えない。

激音、濃音、無声歯茎摩擦音 (s)、無声声門摩擦音 (h) を語頭子音として持つ短母音系列の場合においては、若年層と同じく第1音節目のみ高い音調型で現れる場合がいくつかの語彙から観察される⁹。

3.3.2.2. 音節数の制約

青陽方言はアクセント型の決定に音節数が大きく関わる。音節数の制約には、文節全体に対する場合と助詞¹⁰に対する場合がある。まず、当方言において文節全体に対する音節数の制約は、5音節以下までは1つのアクセント単位にまとまるが、6音節以上になると、音節数の制約により、アクセント単位が2つに分かれる。但し、複合名詞は場合によっては文節全体の音節数が5音節以下でもアクセント単位が2つに分かれて現れる場合もある。

- | | | | |
|-------------------------|--------------|--------------------|--------------------|
| (13) | -bo.da (一より) | -bo.da.neun (一よりは) | -e.seo.bo.da (でより) |
| a. a.i (子供) | [○○]◎◎ | [○○]◎◎◎ | [○○ ◎◎]◎◎ |
| b. gor.jja.gi (谷) | [○○]○○◎ | [○○○] ◎◎◎ | [○○○ ◎◎]◎◎ |
| c. nang.tteo.reo.ji (崖) | [○○○○] ◎◎ | [○○○○] ◎◎◎ | [○○○○ ◎◎]◎◎ |

次は、助詞に対する音節数の制約であるが、文節全体が6音節以上である上で、アクセント単位が2つに分かれた際に助詞の音節数が4音節以上であれば、アクセント単位も完全に独立して現れるが、3音節以下であれば、音節数の制約により、アクセント単位は切れていても完全には独立せずに、名詞と助詞の境界を基準に名詞は高く、助詞は低く現れる。つまり、アクセント単位の切れ目に関与し、切れ目の前にある名詞は高く現れ、切れ目の後ろにある助詞は低く現れるのである。そのため、文節全体が6音節であるにも関わらず、2音節名詞+4音節助詞¹¹からなる場合、3音節名詞+3音節助詞からなる場合、4音節名詞+2音節助詞からなる場合が互いに異なるアクセント型で現れるわけである。上記の3つの場合を詳しく見ていくと、

⁹ ppong (桑), som (綿), jjag (対のものの片方), jjam (隙間), cheor (鉄), chum (踊り) の語例で若年層と同様、第1音節目のみ高い音調型が現れた。しかし、すぐ第1・2音節目が高い音調型に変わって現れる。

¹⁰ 複合名詞においては後部要素に、用言においては活用語尾にあたる。ここでは便宜上、助詞を代表として用いる。一方で名詞は複合名詞においては前部要素に、用言においては語幹にあたる。

¹¹ 2つ以上の助詞からなる場合も含む。

2 音節名詞 + 4 音節助詞からなる場合は、助詞の音節数が 4 音節以上であるため、助詞が完全に独立したアクセント単位になる。この場合もアクセント単位の切れ目の前にある名詞は高い音調で現れる。しかし、3 音節名詞 + 3 音節助詞からなる場合は、助詞の音節数が 4 音節未満であるため、アクセント単位は切れていても完全には独立せずに、名詞と助詞の境界を基準に名詞は高く、助詞は低くなる。つまり、高い音調が 3 つ続くアクセント型で現れるのである。4 音節名詞 + 2 音節助詞からなる場合も 3 音節名詞 + 3 音節助詞からなる場合と同様である。表面的には、高い音調が 4 つ続くアクセント型で現れることから 2 音節名詞 + 4 音節助詞からなる場合と同じであると捉えられがちであるが、4 音節名詞 + 2 音節助詞からなる場合は音節数の制約が働いた結果のものであり、2 音節名詞 + 4 音節助詞からなる場合は音節数の制約が働いていないものである。

- (14) a. 2 + 4 構造 ma.ru-e.seo.bo.da [○○|○○]○○ (板の間でより)
 b. 3 + 3 構造 mi.na.ri-bo.da.neun [○○○]|○○○ (芹ーよりは)
 c. 4 + 2 構造 gwi.ttu.ra.mi-bo.da [○○○○]|○○ (コオロギーより)

3.3.3. 複合名詞のアクセント

2 要素かつ 5 音節以下からなる複合名詞と 3 要素以上かつ 6 音節以上からなる複合名詞に分けてそれぞれのアクセント特徴を見る。

3.3.3.1. 2 要素かつ 5 音節以下からなる複合名詞

文節全体が 5 音節以下であれば、音節数に応じて表 3 で示されたアクセント型で現れる。

- (15) 1 音節名詞 + 1 音節名詞
 gug (汁) + mur (水) → gug.mur (汁)
 [○]]. + [○]]. → [○○].
- (16) 1 音節名詞 + 2 音節名詞
 bam (栗) + na.mu (木) → bam.na.mu (栗の木)
 [○]]. + [○○]. → [○○○○].
- (17) 2 音節名詞 + 2 音節名詞
 gar.chi (太刀魚) + jo.rim (煮物) → gar.chi.jo.rim (太刀魚の切り身の煮つけ)
 [○○]. + [○○]. → [○○○○].

(18) 2音節名詞 + 3音節名詞

gwa.ir (果物) + kkeob.de.gi (皮) → gwa.ir.kkeob.de.gi (果物の皮)

[○]○。 + [○○]○。 → [○○]○○○。

しかし、2要素からなる複合名詞であっても6音節以上になると、アクセント単位が2つに分かれる。そして、3.3.2.2節で既述した通り、アクセント単位が2つに分かれる場合、後部要素の音節数が4音節以上であれば、アクセント単位も完全に独立して現れるが、後部要素が4音節未満であれば、アクセント単位は切れていても完全には独立せずに、前部要素と後部要素の境界を基準に前部要素は高く現れ、後部要素は低く現れる。

(19) 2音節名詞 + 4音節名詞

ga.seum (胸) + ji.neu.reo.mi (ヒレ) → ga.seum.ji.neu.reo.mi (胸びれ)

[○]○。 + [○○]○○。 → [○○|○○]○○。

(20) 3音節名詞 + 3音節名詞

bi.di.o (ビデオ) + te.i.peu (テープ) → bi.de.o.te.o.peu (ビデオテープ)

[○○]○。 + [○○]○。 → [○○○]|○○○。

(21) 4音節名詞 + 2音節名詞

ar.re.reu.gi (アレルギー) + ban.eung (反応) → ar.re.reu.gi.ban.eung (アレルギー反応)

[○○]○○。 + [○]○。 → [○○○○]|○○。

年配層の場合は既に述べた通り、母音の長短は持つが、若年層と同じ特徴を持つ。

(22) 1音節名詞 + 2音節名詞

ba:m (栗) + na.mu (木) → ba:m.na.mu (栗の木) → ba:m.na.mu-da (栗の木ーだ)

[○:]。 + [○]○。 → [○:]○○/[○:]○。 → [○:]○○。

(23) 1音節名詞 + 3音節名詞

so: (牛) + dar.gu.ji (車) → so:.dar.gu.ji (牛車) → so:.dar.gu.ji-da (牛車ーだ)

[○:]。 + [○○]○。 → [○:]○○。 → [○:]○○○。

(24) 2音節名詞 + 3音節名詞

da:m.bae (タバコ) + jae.tteor.i (灰皿) → da:m.bae.jae.tteor.i (灰皿)
→ da:m.bae.jae.tteor.i-da (灰皿-だ)

[○:]○。 + [○○]○。 → [○:○]○○○。
→ [○:○|○○]○○。

助詞あるいは助動詞が付いた名詞の場合は、5音節以下までは、1つのアクセント単位に必ずまとまる特徴を持つ。しかし、複合名詞の場合は文節全体の音節数が5音節以下であっても1つにまとまらずにアクセント単位が2つに分かれる場合¹²がある。

一方で、複合名詞が1つのアクセント単位にまとまっているか、2つ以上のアクセント単位に分かれているかを判断する上で若年層と年配層とで少し相違が見られる。若年層の場合は専ら高い音調の数によって判断されるが、年配層の場合は、高い音調の数だけでなく、母音の長短によっても判断できる。つまり、後部要素が長母音で始まる単語を持つ複合名詞の場合は、後部要素の長母音の実現の有無によってアクセント単位の数判断できるのである。

(25) 1音節名詞 + 3音節名詞

myeo:n (面) + sa:.mu.so (事務所) → myeo:n.sa.mu.so/myeo:n.sa:.mu.so (面事務所)
[○:]。 + [○:○]○。 → [○:○]○○/[○:|○:○]○。

(26) 2音節名詞 + 3音節名詞

go.chu (唐辛子) + ja:m.ja.ri (トンボ) → go.chu.jam.ja.ri/go.chu.ja:m.ja.ri (赤とんぼ)
→ go.chu.ja:m.ja.ri-yo (赤とんぼ-だ)

[○]○。 + [○]○○。 → [○○]○○○/[○○|○:○]○¹³。
→ [○○|○:○]○○。

上記の例を見ると分かるように、後部要素に長母音が現れない場合は、1つのアクセント単

¹² アクセント単位が2つに分かれる複合名詞の場合は、話者の複合名詞に対する意識が大きく関わる。このようにアクセント単位が2つに分かれるものは話者も2つの語がただ並んだ構造だと認識している場合が多い。しかし、この現象は、インフォーマントによっては1つのアクセント単位にまとまる場合もあるため、個人差が大きいと考えられる。

¹³ アクセント単位が2つに分かれている場合、前部要素である go.chu (唐辛子) がたまに○ [○] 型に発音されたが、これは、イントネーションによるものであると考えられる。当方言は言い続ける際に途中で休止が入ると、続いていることを示すために、文節あるいは句の最後の音節が高くなる場合がある。

位にまとまっていると判断できる。後部要素に長母音が現れる場合は、アクセント単位が1つにまとまらず、2つに分かれていると判断できる。

3.3.3.2. 3要素以上かつ6音節以上の複合名詞¹⁴

3要素以上かつ6音節以上になると、基本的にアクセント単位が1つにまとまらず、いくつかのアクセント単位に分かれる特徴を持つ。ここでは、2音節名詞のみを対象に3要素以上かつ6音節以上からなる複合名詞のアクセントについて見る。

3.3.3.2.1. 2 + 2 + 2 構造

2 + 2 + 2 構造は、第2要素と第3要素が一つのアクセント単位を成す。一方で、第1要素とは切れ目が生じ、第1要素はただ並んでいるだけの構造を取る。しかし、第1要素はアクセント単位の切れ目の前にあるため、高い音調で現れる。

(27) dae.jung + gyo.tong + yo.geum → dae.jung.gyo.tong.yo.geum

大衆 + 共通 + 料金 → 大衆共通料金

[○]○。 + [○]○。 + [○]○。 → [○○|○○]○○。

(28) jeon.gi + nan.bang + yong.pum → jeon.gi.nan.bang.yong.pum

電気 + 暖房 + 用品 → 電気暖房用品

[○]○。 + [○]○。 + [○]○。 → [○○|○○]○○。

一方で、分節音によって第3要素が本来のアクセント型として現れ、結果的に3つの要素がどの要素とも結合せずに、単に並んでいるだけの構造の音調型で現れる場合がある。アクセント単位が複数ある場合は、最も後ろにある切れ目を基準にその前の要素は全て高く続く。

(29) ja.yu + mu.yeog + hyeob.jeong → ja.yu.mu.yeog.hyeob.jeong

自由 + 貿易 + 協定 → 自由貿易協定

[○]○。 + [○]○。 + [○]○。 → [○○|○○]○○。/[○○|○○|○]○。

¹⁴ 年配層を対象とした調査はまだ行っていないのでこの節では主に若年層の資料を用いる。

- (30) eum.sig+seob.chwi+seub.gwan → eum.sig.seob.chwi.seub.gwan
 飲食+摂取+習慣→飲食摂取習慣
 [○]○。+ [○]○。+ [○]○。→ [○○|○○]○○。/[○○|○○|○]○。

3.3.3.2.2. 2 + 2 + 2 + 2 構造

2 + 2 + 2 + 2 の構造の複合名詞においては、第3要素と第4要素が結合して一つのアクセント単位を成す。第1要素と第2要素はただ並んでいる構造を取る。

- (31) hang.mun+jig.jang+gi.neung+geom.sa → hang.mun.jig.jang.gi.neung.geom.sa
 肛門+直腸+機能+検査→肛門直腸機能検査
 [○]○。+ [○]○。+ [○]○。+ [○]○。→ [○○|○○|○○]○○。

- (32) han.gug+to.ji+ju.taeg+gong.sa → han.gug.to.ji.ju.taeg.gong.sa
 韓国+土地+住宅+公社→韓国土地住宅公社
 [○]○。+ [○]○。+ [○]○。+ [○]○。→ [○○|○○|○○]○○。

一方で、語例(33)、(34)の場合、基本的には、語例(31)と(32)の音調型としても現れるが、第1要素と第2要素、第3要素と第4要素がそれぞれ意味的なまとまりが強いため、第1要素と第2要素、第3要素と第4要素が各々1つのアクセント単位を成して現れる場合がある。以下に例を示す。

- (33) jeon.ja+je.pum+har.in+mae.jang → jeon.ja.je.pum.(h)ar.in.mae.jang
 電子+製品+割引+売り場→電子製品割引売り場
 [○]○。+ [○]○。+ [○]○。+ [○]○。→ [○○|○○|○○]○○/
 [○○]○○|[○○]○○。

- (34) ya.saeng+dong.mur+bo.(h)o+gu.yeog → ya.saeng.dong.mur.bo.(h)o.gu.yeog
 野生+動物+保護+区域→野生+動物+保護+区域
 [○]○。+ [○]○。+ [○]○。+ [○]○。→ [○○|○○|○○]○○/
 [○○]○○|[○○]○○。

語例(35)は、語例(31), (32)と同じアクセント型として現れるが、第4要素の語頭子音が無声歯茎摩擦音 (s) であるため、本来のアクセント型が保たれ、結局、4つの要素が全て結合せずに、ただ並んでいるだけの構造を取る場合である。

- (35) bur.u+i.us+dob.gi+seong.geum → bur.u.i.us.dob.gi.seong.geum

不遇+隣+助け+誠金→不遇な人のための寄付金

[○]○。+ [○]○。+ [○]○。+ [○]○。 → [○○|○○|○○]○○/
[○○|○○|○○|○]○。

3.3.3.2.3. 2+2+2+2+2 構造

2+2+2+2+2 構造は、第4要素と第5要素が結合して1つのアクセント単位を成す。第4要素と第5要素以外の要素は結合せずにそのまま本来のアクセント型を保持している。

- (36) jig.eob+neung.ryeog+gae.bar+hun.ryeon+gyo.sa →

jig.eob.neung.ryeog.gae.bar.(h)un.ryeon.gyo.sa

職業+能力+開発+訓練+教師→職業能力開発訓練教師

[○]○。+ [○]○。+ [○]○。+ [○]○。+ [○]○。 → [○○|○○|○○|○○]○○。

- (37) gug.ga+yeong.eo+neung.ryeog+pyeong.ga+si.(h)eom →

gug.ga.yeong.eo.neung.ryeog.pyeong.ga.si.(h)eom

国家+英語+能力+評価+試験→国家英語能力評価試験

[○]○。+ [○]○。+ [○]○。+ [○]○。+ [○]○。 →
[○○|○○|○○|○○]○○。
/ [○○|○○|○○|○○|○]○。

- (38) han.gug+geon.chug+gu.jo+gi.sur+hyeob.(h)oi →

han.gug.geon.chug.gu.jo.gi.sur.(h)yeo.(h)oi

韓国+建築+構造+技術+協会→韓国建築構造技術協会

[○]○。+ [○]○。+ [○]○。+ [○]○。+ [○]○。 →
[○○|○○|○○|○○]○○。
/ [○○|○○|○○|○○|○]○。

語例(37)と(38)の場合は、第5要素が無声声門摩擦音 (h) を語頭子音として持つ場合であるが、韓国語において無声声門摩擦音 (h) は語中ではよく脱落する。それ故に、脱落すると第4要素

と第5要素が1つのアクセント単位を形成する場合が多い。一方で、脱落しないと第4要素と第5要素が結合せずに、2つのアクセント単位になる場合が多い。

3つ以上の2音節名詞からなる複合名詞の場合、例外はいくつかあるものの、基本的に右側から左側へ向かって結合していく特徴を持つと言える。結合の仕方は最後要素とその直前の要素どうしのみ結合し、それ以外の要素はいくら増えても結合せずに単に高い音調に変わって並ぶだけの構造を取る。

3.3.4. 用言¹⁵のアクセント

用言のアクセント¹⁶は名詞と同じアクセント特徴を持つ。

1音節語幹用言は、基本形では、第1音節目のみ高いアクセント型で現れ、2音節以上の活用形が付くと、第1音節と第2音節目が高いアクセント型で現れる。

基本形	過去形	丁寧形	ーて (中止)
(39) ga-da (行く) [○]○。	ga-ss.da [○]○。	ga-b.ni.da [○○]○。	ga-go [○]○。
(40) dar-da (甘い) [○]○。	dar-ass.da [○○]○。	da-b.ni.da [○○]○。	dar.go [○]○。

2音節以上の語幹用言の場合は基本形から第1音節目と第2音節目が高いアクセント型として現れ、活用してもアクセント特徴は一貫している。

(41) ga.ji-da (持つ) [○○]○。	ga.jy-eoss.da [○○]○。	ga.ji-m.ni.da [○○]○○。	ga.ji-go [○○]○。
(42) ar.maj-da (相応しい) [○○]○。	ar.maj.ass.da [○○]○○。	ar.maj-seub.ni.da [○○]○○○。	ar.maj-go [○○]○。

¹⁵ アクセントの面において動詞も形容詞も同じ特徴を持つため、ここでは分けずに用言として扱う。

¹⁶ 年配層においても調査を行ったが、現在形と過去形しか調査を終わっていないのでここでは取り上げない。但し、今までの調査では、母音の長短が現れる点においては若年層とは異なるが、音調の面ではほぼ同じ特徴を持っていた。

- | | | | |
|--------------------------|--------------------|--------------------|---------------|
| (43) gi.da.ri-da (待つ) | gi.da.ry-eoss.da | gi.da.ri-b.ni.da | gi.da.ri.go |
| [○○]○○。 | [○○]○○。 | [○○]○○○。 | [○○]○○。 |
| (44) neom.eo.ji-da (倒れる) | neom.eo.jy-eoss.da | neom.eo.ji-b.ni.da | neom.eo.ji-go |
| [○○]○○ | [○○]○○。 | [○○]○○○。 | [○○]○○。 |

但し、文節全体が同じ音節数であるにも関わらず、名詞の音節数と助詞の音節数の相違がアクセント型に影響を与え、異なるアクセント型で現れる名詞の場合と同様、用言の場合も同じ音節数を有するにも関わらず、-da からなる用言と-ha.da (一する) からなる用言¹⁷とで異なるアクセント型が現れる場合がある。具体的に説明すると、-da からなる用言と-ha.da からなる用言にそれぞれ活用語尾が付いて文節全体が6音節になると、-da からなる用言は高い音調が3つ続くアクセント型として現れるのに対し、-ha.da 用言は高い音調が4つ続くアクセント型として現れる。

名詞の場合と違い、用言の場合は活用により、半母音化や縮約などの変化が起こり、説明しにくい部分があるが、この場合も3.3.2.2節で述べた通り、活用語尾の音節数の制約によって上記のような相違が現れると考えられる。6音節の場合、-da からなる用言の活用語尾の音節数が4音節未満であることが分かる。この場合は、アクセント単位は切れていても完全には独立せずに、用言の語幹と活用語尾の境界を基準に活用語尾は低く現れる。用言の語幹はアクセント単位の切れ目の前にあるため、高い音調で続く。

一方、-ha.da からなる用言の場合は -da からなる用言と同じ音節数であるが、アクセント上は名詞と ha.da (する) の境界でアクセント単位が切れる。そのため、活用語尾に音節数の制約が働かずにアクセント単位も完全に独立して現れる。

文節全体が7音節である場合は表面的には同じアクセント型として現れるが、実は異なるアクセント単位の切れ目の位置により、-da からなる用言の活用語尾には音節数の制約が働いており、-ha.da からなる用言の活用語尾は音節数の制約が働いていない。

¹⁷ -da からなる用言とは、ka-da (行く), na.bbeu-da (悪い) などのように -da から構成された用言を指し、-ha.da からなる用言とは yu.myeong.ha-da (有名だ), jeong.hwag.ha-da (正確だ) などのように -ha.da から構成された用言を指す。

表4 -da からなる用言と-ha.da からなる用言とのアクセント型の相違

	基本形	全体音節数 = 6 音節	全体音節数 = 7 音節
-da からなる用言	[○○]○○。 ga.da.deum-da (気を取り直す)	[○○○] ○○○。 ga.da.deum-seub.ni.da (気を取り直します)	[○○○○] ○○○。 ga.da.deum-eoss. seub.ni.da (気を取り直しました)
	[○○]○○。 gan.ji.reob-da (くすぐったい)	[○○○] ○○○。 gan.ji.reob-seub.ni.da (くすぐったいです)	[○○○○] ○○○ gan.ji.reo.wo-ss. seub.ni.da (くすぐったかったです)
-ha.da からなる用言	[○○]○○。 yu.myeong.ha-da (有名だ)	[○○ ○○]○○。 yu.myeong.ha-sib.ni.da (有名でいらっしゃいます)	[○○ ○○]○○○。 yu.myeong.ha-syeoss. seub.ni.da (有名でいらっしゃいました)
	[○○]○○。 jeong.(h)wag.ha-da (正確だ)	[○○ ○○]○○。 jeong.(h)wag.ha-sib. ni.da (正確でいらっしゃいます)	[○○ ○○]○○○。 jeong.(h)wag.ha-syeoss. seub.ni.da (正確でいらっしゃいました)

3.3.5. 言い切り形と接続形の区別

当方言は言い切り形と接続形の区別を持つ。言い切り形が下降を持つのにに対して接続形は下降を持たないのが大きな特徴であると言える。以下には音節ごとに単語単独形の場合の接続形と助詞が付いた場合の接続形を示す。

- (45)
- | 単独形 | -i/-ga (ーが) | -bo.da (ーより) | -bo.da.neun (ーよりは) | |
|----------------------|-------------|--------------|--------------------|------------|
| a. mur (水) | [○… | [○○… | [○○○… | [○○○○… |
| b. ga.eur (秋) | [○○… | [○○○… | [○○○○… | [○○○○○… |
| c. bi.dur.gi (鳩) | [○○○… | [○○○○… | [○○○○○… | [○○○ ○○○… |
| d. mi.kku.ra.ji (泥鰌) | [○○○○… | [○○○○○… | [○○○○ ○○○… | [○○○○ ○○○… |

一方、文節末音節が他の音節の音調よりはるかに高い音調で現れる場合がある。以下、その音調型を示す。

表5 文節末卓立の音調

	+ 1 音節助詞	+ 2 音節助詞	+ 3 音節助詞
1 音節語	○[◎]	○○[◎]	[○○]◎[◎]
2 音節語	○○[◎]	[○○]◎[◎]	[○○]◎◎[◎]
3 音節語	[○○]○[◎]	[○○]○○[◎]	[○○○] ◎◎[◎]
4 音節語	[○○]○○[◎]	[○○○○] ◎[◎]	[○○○○] ◎◎ [◎]

このような音調は前の文節と次に来る文節の間にポーズが入った時、よく現れる。これは、ポーズによって言い切り形と混同されるのを避けるため、文節末の音節を高い音調にすることで、次に何かが続くということを積極的に示す働きをされると考えられる。

音節ごとに特徴を見てみると、まず、文節全体が2音節になると、第1音節目が低く、第2音節目が高い音調型になるが、実際の音声では、第1音節目の音調も決して低くないが、第2音節目が特に高い音調で現れる。文節全体が3音節になった場合は、文節末の音調が遥かに高い音調で現れる場合もある。

文節全体が4音節以上になると、音節数が十分であるため、アクセント型の上に文節末の音節が高くなる音調が被さって両方の特徴が現れるようになる。

4. おわり

以上、忠清道青陽方言を対象に単純名詞のアクセント、複合名詞のアクセント、用言のアクセントを記述・分析した。その結果、分節音と音節数がアクセント型の決定に影響を与えるものの、品詞を問わず、文節の第1音節目と第2音節目が高い一型アクセントであることが分かった。

複合名詞のアクセントに関しては、2要素かつ5音節以下からなる複合名詞は名詞の場合と同じアクセント特徴を持つ。但し、2要素からなっても語全体が6音節以上になるとアクセント単位が2つに分かれる。3要素以上かつ6音節以上からなる複合名詞は、基本的にアクセント単位が2つに分かれる。結合の仕方は、最後の要素とその直前の要素が結合して1つのアクセント単位を成し、それ以外の要素はただ並ぶだけの構造を取る。

一方、当方言は言い切り形と接続形の区別を持ち、言い切り形は文節内で必ず下降が持つものに対し、接続形は下降を持たない特徴を持つ。

(ちえ ひょんじん・言語文学専攻)

〈参考文献〉

- 李文淑 (2003) 「韓国語全州方言のアクセント」『東京大学言語学論集』22 pp 157-173
- 李文淑 (2005) 「全羅道光州方言の音調について」『東京大学言語学論集』24 pp 115-139
- 李文淑 (2006) 「韓国語全州方言の複合語における音調の特徴」『朝鮮語研究』 pp 115-144
- 李文淑 (2007) 「全羅道方言から見た韓国語のアクセント変化について」東京大学大学院人文社会系研究科 博士学位論文
- 李文淑 (2010) 「全羅道方言アクセントの再考察」『東京大学言語学論集』29 pp 139-153
- 上野善道 (1984) 「N 型アクセントの一般性について」『現代方言学の課題第2巻 記述研究篇』明治書院 pp 167-209
- 上野善道 (1976) 「日本語のアクセント」『岩波講座 日本語 5 音韻』岩波書店 pp 281-321
- 孫在賢 (2005) 「韓国語のアクセントタイプと分類」日本言語学会第130回大会予稿集
- 孫在賢 (2007) 「韓国語諸方言アクセントの記述研究」博士学位論文 東京大学人文社会系研究科基礎文化研究専攻言語学専門分野
- 崔鉉鎮 (2012) 「韓国語青陽方言のアクセント研究」北海道大学大学院 修士論文
- 福井玲 (2001) 「韓国語のアクセント」『音声研究』第5巻第1号 pp 11-17
- 山口幸洋 (1999) 『日本語方言一型アクセントの研究』ひつじ書房